

興福寺南大門の発掘調査

—現地説明会資料—

2009年9月27日(日)

法相宗大本山 興福寺

独立行政法人国立文化財機構

奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査の経緯

興福寺は山階寺ともい、藤原不比等が奈良時代はじめ(8世紀前半)に現在の地に建立しました。かつては中金堂院を中心とする一大伽藍を誇り(図1)、16世紀にはイエズス会の宣教師がその偉観を書き記すほどでした(『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』第三期第2巻)が、1:要伽藍は11~18世紀にかけて7度焼失しています(表1)。最後の焼失は享保2年(1717)で、南大門もこのときに失われ、以後再建されることはありませんでした。

現在は「興福寺境内整備基本構想」にもとづき、寺観の復元・史跡地としての整備が実施されています。この整備事業にもない、奈良文化財研究所では1998年以來、中金堂とその回廊・中門の発掘調査をおこなってきました。南大門の発掘調査もその一環で、2009年7月中旬より調査を開始しました。調査面積は約830㎡で、今秋までの調査予定です。

興福寺南大門

南大門は興福寺の正門にあたり、すぐ南側の平城京の三条大路に開いています。『興福寺流記』や『春日社受茶羅』などから、南大門は桁行5間×梁行2間の重層門で、門の両端には金剛力士像が立っていたことが知られています。

また、南大門とその南側の空間は、薪御能(猿蓑)などの神事芸能や、「南大門交着」など春日若宮御祭の祭事が催される、宗教的に重要な儀礼の場でもありました。なかでも薪能は、南大門前の「般若の芝」を舞台とする宗教行事であり、現在は5月におこなわれています。

検出遺構

調査はなお続きますが、現在すでに見つかった南大門の遺構は次の通りです。

遺物 基壇上では、南大門の礎石とその抜取穴を検出しました。残っていたのは15基分で、東端の3基は近代以降に削平されていました。遺存する礎石はすべて花崗岩で、多くは砕かれています。中には礎石の輪郭をとどめたものもあります。抜取穴の断面の様子などから、これらの礎石は創建時のものと考えています。

礎石やその抜取穴の配置から、南大門は桁行5間×梁行2間で、東西23.4m(78尺)、南北9.0m(30尺)に復元できます。柱間寸法は、桁行の中央3間が4.8m(16尺)等間、両端の間は4.5m(15尺)で、梁行は4.5m(15尺)となります。

金剛力士像の基礎 先に触れたように、南大門には2体の金剛力士像がありました。力士像は最後の火災(享保2年;1717)で失われましたが、今回の発掘調査ではその基礎を東西2箇所で見出しました。東側の基礎は近代の削平で半分を残すのみですが、西側のそれは完存しており、一辺約2.8mの方形の穴の中に切石を据え付けています。切石はおもに三笠山の山中に産する地獄谷落結凝灰岩で、その上面は同じ高さで揃っています。おそらくこの上に力士像本体の台座がすわり、巨大な金剛力士像を支えていたのでしょう。なお、現在みられる掘付穴の埋土には灰などが混じり、いずれかの火災後に設置されたものとみられます。

基壇と階段 基壇の縁辺では、基壇外装の一部(地覆石)とその抜取溝を検出しました。地覆石には地獄谷落結凝灰岩と花崗岩とを用いています。落結凝灰岩の地覆石は基壇北辺と東北隅・東南隅に残り、東南隅では同時期とみられる玉石敷も残存していました。一方、花崗岩の地覆石は南階段の南辺に残っており、その抜取溝が基壇の周囲をめぐっていました。創建時の地覆石は未確認ですが、その掘付痕とみられる溝を複数の断面で確認しています。

層位ならびに使用石材から、外装部の改修は次のように整理できます。すなわち、基壇外装は創建時(奈良時代)→地獄谷落結凝灰岩の地覆石+玉石敷(改修①)→花崗岩の地覆石(改修②)と改められ、最後には花崗岩の地覆石もほぼ撤去されました。2時期の抜取溝はほぼ同位置で重なり、基壇外装が旧規を保ちつつ改修されたとわかります。地覆石やその抜取溝から判明する基壇の規模は東西31.0m、南北16.7mです。基壇の高さは、傾斜面に造営されているために、北面の地覆石との比高で約0.9m、東南隅地覆石とで約1.4mとなり、南面での高低差が激だっています。

なお基壇本体は、土を1層ずつ積み固める版築工法で築かれています。版築層は厚さ5~20cmで、随所でその積層線を観察できます。また、階段部は基壇造成のち、土を積んで造りだしたもので、その幅は中央3間の幅(14.4m)に一致します。北階段の出は調査区外のため計測できませんが、南階段の出は約1.5mです。

このほか、基壇そのものは明治年間大きく削られたのち、その後再び盛土を施していたことがわかりました。盛土の時期は、出土した1銭銅貨から大正9年以降といえます。

まとめ

興福寺南大門の発掘調査成果は、次のようにまとめられます。

- ① 礎石やその抜取穴の配置から、南大門の規模が明らかになりました。すなわち、南大門は桁行5間×梁行2間で、東西23.1m、南北9.0mの規模をもちます。これは、史料または古絵図の南大門とほぼ符合します。焼失前の南大門は、さぞかし偉観を誇っていたことでしょう。
 - ② 基壇上で、金剛力士像の基礎を確認しました。その基礎は方形の掘付穴のなかに切石を据え付けたもので、この上に力士像の台座が設置されたと考えられます。
 - ③ 地覆石やその抜取溝からは基壇が東西31.0m、南北16.7mの規模とわかり、少なくとも2度の改修(改修①→同②)を経ていたことも判明しました。中金堂や回廊・中門の調査成果を考えると、改修①は平安時代(11世紀)、改修②は室町時代(14世紀前半)にあたるでしょう。一方、『大和名所図会』(18世紀末)からは、享保焼失以後も遺正積の基壇が残っていた様子がうかがえます。したがって、最後に花崗岩の地覆石を抜き取ったのは近代以降のことで、おそらく明治年間と考えられます。
- 最後に、今後の調査課題を挙げておきましょう。
- ① **造営前の地形** 南大門の造営時には、盛土・整地など大規模な地形改変をおこなっていたようです。たとえば北面の中門では、自然の谷を埋めたうえで基壇を築いています。古地形や造営による地形改変の様子を、今後明らかにしてゆきます。
 - ② **力士像の基礎** 基壇上で見つかった力士像の基礎については、さらなる検討が必要です。それが享保2年の焼失まで力士像を支えていたのは確実でしょうが、創建時にさかのぼる可能性は低いとみられます。補足調査をおこなうなかで、設置時期を確定してゆきます。
 - ③ **築地塀** 南大門の東西には築地塀があり、門の基壇にとりついていたことが古絵図から知られます。現在、築地塀の痕跡は未確認で、門へのとりつき状況も明らかではありません。今後の調査のなかで、築地塀等の痕跡を確認したいと考えています。

表1 興福寺南大門 罹災年表

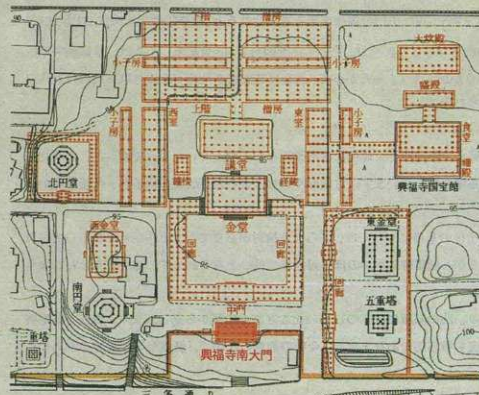
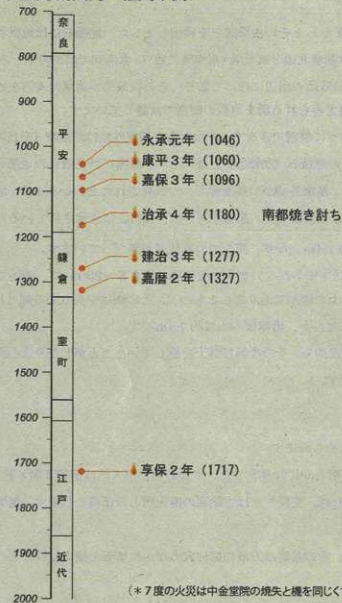


図1 興福寺伽藍配置図(『奈良六大寺大観 補訂版』第7巻 岩波書店に加筆)

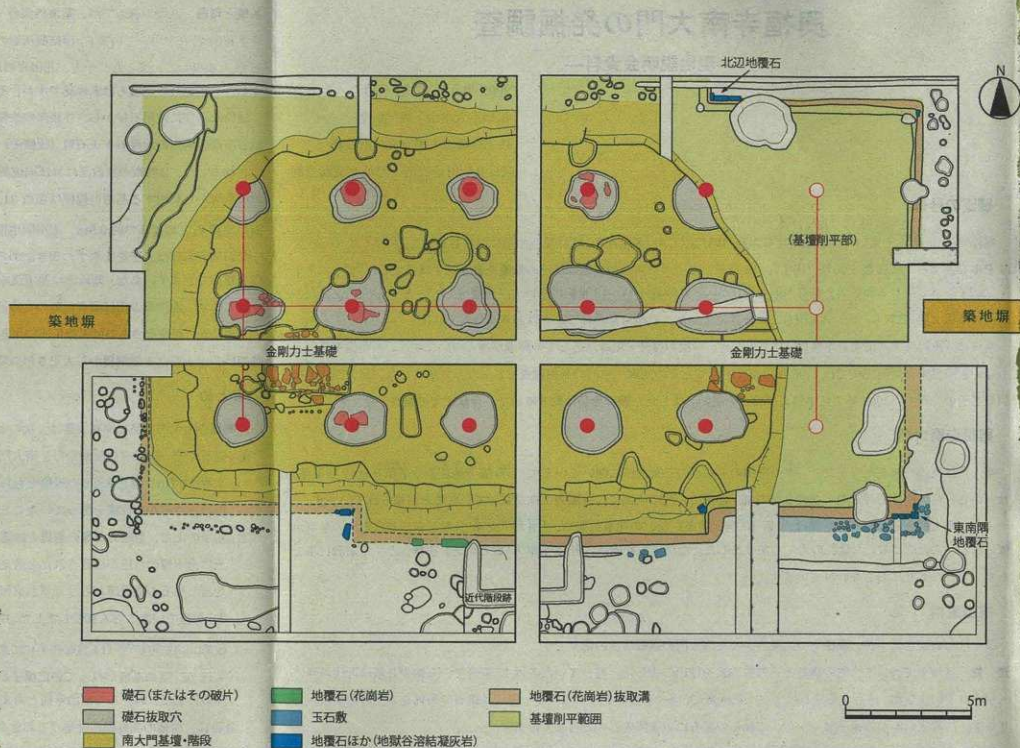


図2 興福寺南大門 遺構平面図(1:150)

現地説明会のご案内を電子メールに切り替えております。

ご希望の方は、お名前・ご住所・メールアドレスを下記アドレスまでお送りください。

Eメールアドレス: heijo@nabunken.go.jp